

## 朗 読 文

オホーツクといえは網走の沖合の海と思っている人が多いが、根室水道をはさんだ知床半島の南も、やはりオホーツクの海である。冬の間、聞こえるものといえは風のすさぶ音だけだったこの海に、空気をつんざくような無気味な響きがたちはじめると春も近い。三月も半ば過ぎ、巨大な流水群が気温の上昇によって亀裂を生じる音は、初めてこの地を訪れた者の肝を冷やすに充分なすさまじいばかりの爆発音である。しかし、雪と氷に閉じ込められた長い冬を耐えてきた土地の人々の耳に、この音は何にも増して、いよいよ春を迎える喜びを奏でるものだ。

オホーツク一帯の流水がゆるむと、亀裂からあちこちに海が顔をのぞかせ、裂け目をさらに大きく拡げる。ちょうど紙にインクのにじむのを見るようだ。アザラシや海馬も、漂う氷の間から顔を出し、海には海馬狩りの銃声が遠く響いている。氷が溶け網走港には百隻を超える内外の漁船が集まって、にわかには活況を呈し始める。かつて北海道の春はどこもニシンの到来で賑わった。どこの家庭でも、獲れたてのニシンを求めて焼いたり、身欠き鯁にしたり、何箱ものニシンの腹を割いて白子と数の子を取ったりした。そのニシンはもう、ほとんど姿を消して、港々に残る鯁御殿のように盛期を偲ぶしかないが、港に春を告げるのが、威勢のいい漁師の声であり、戦場さながらの混乱のなかでの水揚げ風景であるのは今も変わらない。サケ、マス、タラバガニなど北海の幸が街にあふれ出し、街の飲み屋では、獲れたばかりの魚が炭火の上に踊る。店頭は無造作に積み上げられた毛ガニを求め、食卓にのせるのもよい。雪解けを待ちかねたように、種まきに備えて農家では客土の作業が始まる。畑の上に点々と土をまいておくと、それだけ雪解けが早まるのだが、薄く雪の残る平地にどこまでも続く客土の跡は、不思議な幾何学模様を見るようだ。このころには、街々の道は、一面の泥濘の海——いたるところ雪解け水でぐちゃぐちゃになって足もとを気にしながら、一寸きざみに歩行者が通っていく。北海道では、このような道をウンだ、というが、膿んだということだろうか。

四月も中旬になると、氷のゆるみ始めた瀟湖の白鳥が大挙してシベリアへ帰っていく。三月頃には数千羽にも達し、湖を埋めつくしていた大群が、さらに南の渡会地からの旅の途中、この湖に羽を休めに降りた仲間と連れだって、三々五々北の空を目指して飛び立つ。